

臨時総集会に向けて
「現代のフランシスコ会の使命」



臨時総集会に向けて
「現代のフランシスコ会の使命」



目 次

昨日から今日へと引き継がれるテキスト	7
マドリッド総集会の宣言「現代のフランシスコ会の使命」とは	9
現代のフランシスコ会の使命	11
はじめに	13
序文	15
福音と信仰	17
教会の中に生きる	19
人々の中で兄弟として	21
すべての人のしもべとして	25
貧しいキリストの弟子として	27
兄弟たちの仕事	31
現代世界における平和の使者として	33
フランシスコ会の組織の意味	35
反省のために	37

臨時総集会に向けて

昨日から今日へと引き継がれるテキスト 総長の手紙

親愛なる管区長、分管区長、兄弟の皆さま
主が皆様に平和をお与えくださいますように！

先日「小さき兄弟会の創立の恵み」という書簡の中に記しましたように、私たちは間もなく会の創立800年祭を迎えようとしています。この大なる恵みの行事を準備するために、2006年にアシジで臨時総集会を開き、この祝賀を通して達成しようとしている目標の一つである、会の識別と刷新に取り掛かる予定であります。

臨時総集会の準備委員会は、総理事会の指名により、副総長フランチェスコ・ブラヴィ、総理事アンプロジオ・ヴァン・シ、タッデー・マチュラ、ヘルマン・シャルック、ジャコモ・ビニ、ホセ・マリア・アレジで構成されており、既に、会のすべての兄弟共同体のための具体的な提案を作成いたしました。この提案の内容は、1973年のマドリッド総集会の宣言「現代のフランシスコ会の使命」を精読し、研究することが中心となっていますので、ここにその資料をお送りいたします。このようにして、総集会に少しずつ備えてゆくことができると思います。

会のすべての管区と兄弟がこの準備に関わるということがとても重要ですので、この資料を直ちに各兄弟に配布して下さるよう、管区長と分管区長にお願いいたします。そして、次のことを行なってください：

兄弟たちがこの資料を個人でよく読み、研究するか、共同体の活動を利用して話し合うかして、よく考えるように励ますこと、

補助的資料として提供した質問に、共同体として答えるように兄弟たちを励ますこと、

各兄弟共同体の回答を管区本部に送ること。一方、管区本部は、各管区から寄せられた回答を3ページ以内にまとめて、ローマ総本部の総集会事務局に2005年の9月までに送ること。

臨時総集会の準備委員会と総理事会は、兄弟たちの研究用に供した資料は古いものの、現代が必要とする活力と普遍性を保持していると考えています。私自身も、1973年の総集会の宣言「現代のフランシスコ会の使命」を熟読、研究し、思い巡らすことは、この総集会および会の創立800年祭を祝うことを通して私たちが達成しようとしている刷新に大いに役に立つのではないかと考えております。

兄弟たちを鼓舞してくださっている管区長や分管区長にあらためて感謝いたしますとともに、兄弟性と小ささへの召命を「より質の高いものにしよう」と努力してくださっているすべての兄弟にも心から感謝いたします。

2005年1月1日、ローマにて
総長 兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバリョ、OFM

マドリッド総集会の宣言「現代のフランシスコ会の使命」とは

絶えず生活様式を新たにしよう求められている私たちは、ここで再び兄弟たちに、1973年の総集会の宣言「現代のフランシスコ会の使命」を提案いたします。

小さき兄弟会は、すべての修道者が「キリスト教的生活の源泉とそれぞれの会の創立当初の精神とに絶えず帰ることと、会の生活および規律を異なった時代の状況に順応させること」(修道生活の刷新・適応に関する教令2)を願っていた第二バチカン公会議の呼びかけに応じて、この刷新のプロセスに着手しました。会の創立に関する数々の歴史的、神学的、霊的な調査に支えられ、また、法制度の改変に至った具体的な刷新の体験を経ながら、一つの長い、献身的な反省のプロセスが始まったのです。公会議が開かれた2年後の1967年の総集会では、会憲を公会議によって示された考え方に順応させるために、長い時間をかけて見直しが行なわれました。その6年後の1973年に、マドリッド総集会は、現代社会におけるフランシスカン・アイデンティティーの理想を、現代的で簡単な分かりやすい言葉で作成された宣言という形で示そうとしました。そして、過去を掘り起こし、現状を分析した結果、公会議の公文書に沿って、様々な発見や提案、質問、体験などが生まれたのです。会はこの宣言を大変積極的に受け入れました。そして、この宣言は、多くの兄弟たちにとって創造的の刺激となり、若い兄弟たちの養成のための基本的な資料となったのです。

この宣言が取り扱っている基本的なテーマは、その後も度々、総集会や総長の公文書、委員会などで取り上げられました。公会議の熱意をもって書かれたこの宣言は、希望に満ちており、すべての兄弟を真剣に良心の糾明を行なうようにと促しつつ、今も楽観的で励みになる文書であり続けています。

小さき兄弟たちの会則の裁可800年記念(1209-2009)を準備するためには、このテキストを読み返すことが、福音計画(gospel project)の再建 再編(re-updating) についてすべての兄弟たちに深く考えさせる刺激となるのではないかと思います。福音計画の再建は、会則が提案していることであり、また、この宣言が公会議の呼びかけに答えて現代に甦らせたことでもあります。30数年経た今、再びこの宣言を個人で、また、共同体として読むことは、回顧的な行為ではなく、現代に直面することになるはずです。

このテキストによって示された考え方について、私たちはどう対応して来たでしょうか？

提案されたことの中で、どれが今でも私たち一人ひとりにとって通用する価値でしょうか？

この宣言の呼びかけに対し、私たちは今日どのように応えることができるでしょうか？理論を実践に移すにはどうすればよいでしょうか？その際、どのような新しいあるいは元のままの決定や、ジェスチャー、段階を用いたらよいでしょうか？テキストの中に、今日ではもう古いと思われる考えや主張があるでしょうか？

この宣言が触れていない新しい状況や、問題があるでしょうか？

私たちの管区が直面している大きな変化と危機の時代に、どのような希望を私たちは持っているでしょうか？また、どのような希望を、キリストを信じる人々に示すことができるでしょうか？

2004年12月11日、ローマにて
「生活様式」委員会の兄弟一同

現代のフランシスコ会の使命
1973年マドリッド総集会の宣言

臨時総集会に向けて

はじめに

1. 現代人であり、神に奉獻された者として、私たち小さき兄弟もまた、自分の生活の意味やそれを自ら自由に選び取る意義、およびこの修道会が今日担っている特別な使命が何であるかについて、あらゆる方面から問いかけられているのを感じています。

まず、キリストが、今こそ福音に生きるようにと、私たちに呼びかけておられます。

次に教会は、この総集会に書簡を寄せられたパウロ6世教皇を通して、「教会におけるあなた方の役割は何ですか?」「現代社会における特別な使命とは何ですか?」と問いかけています。

この世界もまた、さまざまな緊張にあえぎ、動揺しながらも、聖フランシスコに対する深い共感を抱いて、私たちがいついitだれなのか、またこの世にどんな手助けができるのかと問いかけています。

最後に、会憲を再検討するためにこの総集会に集まった私たち自身が、この修道会の歴史において先輩たちがたびたびしてきたように、自分たちは何者であるか、また現代における特別な使命とは何かを探求しているのです。

2. これらの問いかけに対して、私たちが作りあげたこの宣言で、誠心誠意答えたいと思います。これは、フランシスコ会の生活のあらゆる要素を説明するものでもなければ、靈的教書でも、神学的論説でもありません。むしろ、フランシスコ会の使命について、既に言われてきたことの根本原理をとらえ、簡潔・的確に説明して、兄弟会の使命の中でも、今日特に深い意義をもつと思われる諸価値を確認しようとしているのです。また、最近出てきた新たな諸問題を考慮し、既に採られているいくつかの具体案をはっき

りさせようとしています。兄弟会で広く同意を得たテーマを本当に実践して、兄弟たちの実生活に活かしてほしい、というのが、この宣言の切実な願いであります。

この宣言を空文に終わらせてはなりません。各管区は、それぞれの状況を総長からの報告書と照らし合わせて、この宣言の研究に努め、特に強調されている要点を取り上げて、その具体化を図らなくてはなりません。

序文

3. 小さき兄弟会の会員として私たちは、まず、アシジのフランシスコに与えられ、教会から是認されたカリスマを信じ、それに生きることを宣言します。このカリスマは、キリスト教社会の内外で、多くの人々が証言しているように、今もなお実際に生き生きと脈うっています。当時の人々の深い渴望を捉え得たこのフランシスコのカリスマによって、私たちもまた、現代社会を眺め、さまざまな論争をはらんだ現代の問いかけに耳を傾けないではいられなくなるのです。その上、私たちの兄弟共同体が今日あるのは、フランシスコとその修道会の歴史的な体験があるからです。それで私たちは、フランシスコに対して忠実でありたいと望んでいるのです。彼は、キリストの福音を、信仰をもって受け入れました。そして自分が兄弟たちといっしょに世に遣わされたのは、その生き方と言葉によって、福音への立ち返りと神の国の到来を教え、人々に示された神の愛を証しするためであることをわきまえていました。この使命を自覚していたからこそ、フランシスコの心には、霊的な活力やどこへでも出かけて行く身軽さ、大胆さがみなぎっていたのです。そしてキリスト者と否とを問わず、だれのところへでも出かけて行って、常に新しく喜ばしい福音を、彼らのまっただ中で分かち合ったのです。かつてこのフランシスコになされた呼びかけが今日の私たちの関心事であり、また、私たちにもなされています。この呼びかけを受け止め、それを生き抜いて、現代人の期待と要望に応えなければなりません。

4. フランシスコと彼の弟子を自称する私たちとの間に、また、掲げた理想と兄弟会の実状との間には隔たりがあります。しかし、だれも逃れることのできないこの世界と教会の危機および兄弟会の現状（総長が報告書「私が見たフランシスコ会」で指摘しているように、退会者の続出、会員の老齢化、召命に対する信頼の薄らぎ）そして何よりもまず、福音に忠実でありたいという私たちの望みが、新たな出発、つまり心底からの回心を強く促している

のです。それには信仰の更新、豊かな想像力と勇気、どんな危険をもものともしない毅然たる態度とすばやい決断力が必要です。弱い者ではあっても、私たちはこの道に邁進し、もっとも強く要望されている点を取り上げていきたいと思えます。

福音と信仰

5. フランシスコの書き物や他の資料からもわかるように、フランシスカンの生活の中心は、イエス・キリストとの個人的出会い、すなわち神への信仰体験です。祈り、兄弟愛、清貧、人々との交わりなど、どんな面から出発しても福音に根ざした生き方の基本は信仰なのです。会則は、常に、神の探求、兄弟たちの生活の中で神が絶対的中心であること、神にふさわしい崇敬と愛を捧げること、キリストに倣い、福音に基づいて生きること、全く自由な聖霊の息吹に心を開くこと、何にもまして絶えず祈ることを勧めています。また、観想、断食、祈り、衣服、清貧、仕事、物乞い、食事など、兄弟たちのあらゆる行為に関わる福音的な出発点として、フランシスカンの生活の根底には、愛である神に対するユニークな信仰体験があることがわかります。

6. この体験は、現代とは全くかけ離れた当時の文化的・宗教的背景の中で行なわれました。しかしそれだからといって、これが現代の私たちの模範にならないとは言えないのです。現代は、今まで安全で良いものだと思われていたいろいろな事柄と共に、信仰上の夢か理想のように思い込んでいたものまでもが崩壊する時代であり、私たちは今、瑣末な問題から、「イエス・キリストの父なる神への信仰」というキリスト教の核心に向かわざるを得なくなっています。この信仰は、純粋な知識でも、神学的な考察でもなく、信仰箇条を復唱することでもなければ、思想的体系でも自由な信念でもありません。それは、イエス・キリストというお方のもとに、神と人間の姿を発見し、そのありのままを、しだいに生き生きと生活の中に受け止めることなのです。こうして私たちが自由に受け入れた信仰　つまり、「イエスを離れては、何もできない」(ヨハネ 15:5) という、聖霊が無償で与えてくださったこの信仰こそが、祈りと貞潔、兄弟愛、清貧と奉仕の生活を支える唯一の堅固な礎であります。

7. このような生活を生き抜くのは、なま易しいことではありません。的確に言葉で表現できませんが、これで到達できたということは決してあり得ないのであって、常にやり直し、いつも新しく始めなければならないのです。単なる言葉に満足したり、すべてに対する答えを得たりしても、何にもなりません。むしろ、神の民の信仰をもって、謙虚に、誠実に、この困難な探求と、多くの人々が共通して抱いている不安要因に取り組む必要があります。

8. 信仰に基づくこの歩みこそ、個人または共同でなされる霊的探求を深めてくれるのです。これだけが私たちの祈りを支えてくれる唯一のものと言えましょう。真剣な祈り、隠遁生活、深い霊的分かち合いの重要性について言える一切のことは、信仰が第一であるという確信に基づいています。ですから、社会や生活自体が投げかける批判を恐れず、絶えずこの信仰を確かめなければなりません。そして、私たちの人生設計の礎をますます堅固なものにすることが大切です。勇気を出してこのように生きるならば、私たちは探求するという行為それ自体によって、神が生きておられ、イエスが主であり、聖霊が私たちを生かしてくださる力であるということを、証しすることができます。そして、この共同体は、私たちだけにとどまらず、人生の意義を探し求めている他の人々にとっても、信仰に目覚め、祈る心が湧きあがり、福音と生活とを結びつける場となることができるでしょう。

教会の中に生きる

9. このように信仰を深めることは、私たちの使命であり、また、社会の現状から求められていることでもあります。それは、教会との深い交わりの中でのみ確実に行なわれ、成し遂げられるのです。「教会の指導と教会への奉仕は、私たちの召命と切っても切り離せないもの」だからです。12・13世紀には、多くの福音的な運動が、教会の難問や、しばしば醜聞と言われるものにも直面し、多くの人々が教会に対立しました。それは、自分たちが必死で生きようとしている福音に教会が不忠実であるように見えたからです。フランシスコは中世の教会の退廃に苦しみながらも、全身全霊で教会と交わり教会のものであろうとしました。彼のこの態度は、決して日和見的な気持ちから出たものではなく、むしろ御自分の教会をペトロとその後継者に委ねられたキリストの御旨に対する深い愛と心からの服従によるものだったのです。種々の奉仕職によって構成されているこの教会は、フランシスコにとって、神の真の御言葉が響き渡り、イエスが秘跡を通して御自分を現わされる特別の場なのでした。彼は教会の内部にあった多くの弱点を知りつつも、なお教会を愛し続け、聖職者たちを師として、また主人として認め、かえって自分自身を罪人と思っていたのです。

10. 今日問題として再び取り上げられていることがらは、ほとんどの場合、教会の組織と関連しています。教会の機構が、信仰と福音の妨げになっていると考えている人が少なくありません。教会の「制度」に対する批判や異論はきわめて激しく、多くの人々が、少なくとも心の中で、教会から離れてしまっており、こうした傾向はフランシスコ会員の中にさえ見られます。

11. 私たちキリスト者が描く教会の姿が、時としてゆがんで見えることも確かにありますが、それでもなお心を込めて教会を愛し、教会と深いかわりあいを持ちたいと思います。教会の中にあっ

てこそ、私たちは自分たちのカリスマを受け、育ててゆくことができるのです。なぜなら教会は、神への信仰とイエスおよび聖霊の生きいきとした現存を保ち、神の国の到来のために働く（ルカ 17:20 21）ように世に遣わされたものだからです。確かに、私たちがこの生き方を真剣に生きれば生きるほど、教会内の人々と組織の凡庸さや弱点に対抗する力となれるのです。しかし同時に、フランシスコの模範に倣って、兄弟であるすべてのキリスト者を愛し、司教、特に「主君である教皇」に、従順と尊敬を表しつつ、教会内における平和と和解の人になりたいと思います。

人々の中で兄弟として

12. 主は私たちが、一人でではなく、兄弟たちの共同体の中で福音に従って生きるように招いてくださいました。私たちの使命は、共同体の中で、共同体であるがゆえに、遂行されます。それは、共同体が神と私たちとの特に恵まれた出会いの場だからです。私たちは、同じ目的を目指して互いに助け合いながら生活を共にするだけでなく、主がお与えになった模範と掟に従って愛し合いながら、互いに深い関わりあいを持ちたいと願っています。お互いを兄弟とみなして尊敬を表し、自分の必要をわかりやすく知らせ、謙虚に互いに奉仕しあいながら、口論、不満、怒り、否定的な判断を避けなければなりません。つまり、言葉だけでなく、行いをもって互いに愛を示し、子に対する母のような思いやりをもって接しなくてはならないということです。

13. このような兄弟愛の生活は、一致と愛の秘跡である御聖体によって養われ、意義を持ちます。そこではまた、霊的な分かち合いをし、物質的な物まで分かち合って、共同の祈りの時だけでなく、兄弟的な意見交換や評価において、また取り組んでいる各自の務めや普段共同で行なわれる生活の中で、神とイエスを探し求めます。じっくり考え、一定の試験期間を経て、神と教会の前で公に表明して自ら進んでこのような生活を選び取ることにより、私たちは永久にこの兄弟的共同体に結ばれます。この生活ではまた、イエスの約束と呼びかけに基づいて、神の国のために自ら貞潔を選ぶ(マタイ 19:12)のですが、それによってこそ、こうした生活様式が実現するのです。

14. この共同体は、聖霊の導きのもとに、社会的、文化的にそれぞれ異なった環境からやってきて、真の友情と尊敬の絆を作り、互いに受け入れようと努力している人々の集まりであって、単なる仕事団体でもなければ、使徒職遂行団体ですらありません。こ

の共同体においては、会員はみな兄弟であり、それぞれ異なっているにしても、平等で自由な人間として共同責任を有しています。詳細にわたった重苦しい組織構成はいらなくても、共同体の「管区長であり、しもべである兄弟」が一致と統一のために必要な奉仕をなし、すべての兄弟は彼に従わなければなりません。このように、主の御旨にかなうことを共に探し求め、互いに相手を受け入れ、他人のために自分の自由を抑制して、共同生活からくる要求および共同体に不可欠の組織に従ってこそ、兄弟たちは主イエス・キリストの真の従順を生き抜くことができるのです。

15. この兄弟共同体は、決して閉鎖的なものではありません。私たちににとっては、誰もがみなキリストの現われなのですから、この共同体はダイナミックにすべての人々に開かれています。自分のもとに来る人にせよ、出かけて行って会う人にせよ、友人であろうと敵であろうと、彼らを心をこめて迎え入れ、愛さなければなりません。フランススカン家族との新しい形態のかかわり合いを望む人々がいれば、彼らといっしょにそれを考えてもよいのです。

現代社会はさまざまな階級や思想体系に分かれています。人間を階級や主義によって判断したり、非難したりすべきではありません。どこにいても福音の証人になるという義務を自覚して、社会との交わりにおいては、信仰のためであっても口論や改宗の強要を避けるべきです。むしろ、謙虚に、礼儀正しく、喜びに溢れて、だれにでも素直な態度で接し、必要ならば無抵抗の姿勢をとり（マタイ 5:39）、自分よりもはるかに偉大な御言葉の奉仕者に過ぎないことを確信して、ただひたすら平和の使者でありたいと願っています。私たちは出会うすべての人に、澄んだ優しい愛を示すことによって、その人がかけがえのない価値をもっていることを、証ししなければなりません。

16. 現代は、経済・社会・政治構造の影響力が強く、人はそれに

惑わされ、真の自由を失っています。私たちはこうした事態に無関心であることはできませんし、また、開発が遅れているために、あるいは搾取されているために人が人間らしい生活ができないような状況を容認することもできません。従って、愛と正義のために、またまさに「平和の使者」という私たちの使命に忠実であるために、これらの社会悪と戦い、圧制者と被圧制者に悔い改めて福音を信じるように告げて（マルコ 1:15）、彼らの解放のために働くことが私たちに求められているのです。

17. 「言葉だけではなく、行いをもって」真の兄弟愛の生活を営むことができるならば、また、自己をとざすことなく、むしろ接するすべての人に心を開くならば、世の人々の期待に応えることができるでしょう。彼らは人間疎外や個性喪失に悩まされて、本当の共同体の出現を待ち望んでいます。ですから、私たちが一般の人々（キリスト者と否とを問わず）と協力して働くならば、人間疎外に悩む個人の寄り集まりではなく、キリストのうちに兄弟的な深いかわりを持った人類共同体を作り上げるパン種になることができるでしょう。

臨時総集会に向けて

すべての人のしもべとして

18. 私たちの「小さき兄弟」という名称は、兄弟愛の大切さと、謙虚な奉仕の心（ミノリタス）の大切さを表しています。会の内部では、互いに従うことが勧められており、職務上一定の権限が与えられるときは、決して支配せず、一切の権力欲を排して、できるだけ謙虚に仕えることが求められています。

19. 神のためにすべての人に友好的で、すべての被造物に仕える私たちは、共同体としても個人としても、「小さき者」らしく、また、「しもべ」らしく振舞います。私たちは特に霊的な目的のために仕えることを望んでおり、支配することも、自分の主張を通すことも望んではいないのですから、だれからも恐れられることはありません。しかしこうした態度をとるには、幼子のような心、謙虚さ、単純さ、人々やものごとに接する時の大胆な楽観主義が必要です。私たちは、制度や思想が不安定なものであること、未来も確実なものではないことを受け入れ、同時に自分が弱く、欠点をもった「取るに足りないしもべ」（ルカ 17:10）であり、神以外に力ある者はないことを認めなければなりません。こうしてこそ、「仕えられるためではなく、仕えるために来られた」（マタイ 20:28）主の姿である、キリスト教共同体の姿を輝かせる一助となるのです。

臨時総集会に向けて

貧しいキリストの弟子として

20．私たちの会則と生活は、すべてにおいてイエス・キリストの足跡に従うことです。キリストは、私たちのために御自分を貧しい者とされたのですから、私たちはこの世で、不案内な人、また旅人として、貧しく謙遜に主に仕えるように招かれています。社会的、精神的な両面で貧しく生きることは、私たちに与えられた特別の、変わらない課題なのです。

21．フランシスコの清貧は本来、福音に根ざしています。それはまず、神の国のためにすべてを捨て、あらゆる善と豊かさの唯一の源であられる神に全面的により頼む心構えを前提とするものでした。彼の清貧は独特のものでしたので、福音についての彼の説教は当時の人々にとってわかりやすく、信じることのできるものでした。中世の修道院が、所有地を耕して生計を立てていた時でさえ、フランシスコは自分や兄弟たちのために土地を所有しようとはしませんでした。彼とその仲間、キリストと使徒たちに倣って、福音を告げ知らせるために全く自由な者となり、巡業の旅をする者としての生活を始めたのです。彼らは他人のところで働いて生活の資を得、どうしてもそれが得られない時には、施しを求めました。時勢に適應するために、フランシスコ会にも改革運動が起こり、「土地」、家、教会などが兄弟たちの使用に供される場合はこれを受けるという制度が取り入れられた時でさえ、特定の社会組織に入るまいとするフランシスコの決意は依然として強く、金銭を受けられることを拒否し、貧しい生活に徹しようとする彼の態度にもそれが表れていました。

22．その頃と社会・経済事情の全くかけ離れた現代において、どうすれば私たちが選んだ清貧の本質的な要素を生かし続けていられるかを考えなければなりません。過去においてフランシスコの徹底した清貧に常に心を惹かれていたフランシスコ会は、物質的に安住してしまう傾向に対して大なり小なり常に抵抗を示してき

ました。現在私たちはみな、この同じ要求をどんな形で表したらよいか、検討しなければならない立場にあります。土地を持たないこと、質素な住居、労働によって得る生活費、雇用不安などは、ほとんどの現代人に共通の生活条件です。しかも人間らしく生きていけない環境に置かれている人々は、それ以上に多いのです。従って、それぞれの地域社会の現状を考慮して、今日どうすれば小さき者として生活できるかを探求するのは、時宜を得たことと言えましょう。私たちは、こうした状況を共にしながらも、兄弟である多くの人々を悲惨な状態に陥れている社会のシステムを受け入れることなく、みなでキリストの救いにあずかるために（ローマ 11:12 参照）招かれている新しい社会のパン種となるよう、彼らと共に努力しなければなりません。

23. このように生活していくならば、私たちは、生産・消費社会の中で、異議を申し立てる役目を果たすことができます。土地や家を持たず、自分の労働によって、質素に気高く生活し、消費者に売り込むことしか考えない広告に負けずに地味に暮らし続けるならば、物質の持つ本当の意味も理解でき、貧しい人々、疎外された人々にも、もっと近づくことができるでしょう。そればかりか、富める社会では何の意味も見いだせず、より少ない物質で、より自由に生きるすべを探し求めている人にも、いっそう近づくことができるのです。

24. 私たちの福音的清貧には、分かち合いということも含まれています。持っているものを兄弟間で分かち合うだけでなく、精神的・物質的に困っている人々に与え、進んで援助の手を差し伸べるようにします。自由に選んだ清貧によって、あらゆる心配から解放された私たちは、主の約束に希望を置いて、喜びの生活を生き抜く時、現代の人々に次のことを証しすることができるでしょう。つまり、この世界には、それを無限に超える意味があること、そしてその意味によって、世界はイエス・キリストという未来に向かって引き寄せられているということです。

25. フランシスコの「太陽の歌」の精神に従い、現代の生産・消費社会の貪欲で無責任な行動に脅かされている自然界に対しても、兄弟的な配慮を怠らざにいたいと思います。神の愛から無償で与えられたこの世界を、ある程度の抑制によって人間らしいものにしたいのです。そうすれば、自然界は完全に兄弟のようになって、すべての人の役に立つにちがいありません。こうして私たちは、現代の人々と共通の関心事を持つことになるのですが、それに対する私たちの態度を支えている理由を明らかにしたいと思います。それは、この被造世界が愛である神によって創られ意義付けられていること、すなわち、キリストのうちに集う兄弟愛に結ばれた人類の出現であって、世界はキリストによって、キリストのために創られたものである、ということです。

臨時総集会に向けて

兄弟たちの仕事

26．労働は私たちの清貧の誓願と切り離すことのできない不可欠のものであります。フランシスコと最初の兄弟たちは、ハンセン病者の世話をしたり、人々に交じって働いたり、説教したりするなど、いろいろな仕事に携わっていました。フランシスコは中世の修道生活というものに、「人々に交じって働く」という革新的な考え方・生き方を取り入れました。働くと言っても、それは現今の意味での聖職者としての仕事が主であったわけではありません。会は当初、小さいながらもさまざまな人々で構成されており、司祭はごく少数だったからです。兄弟たちは、できれば自分の持っている技術や職業を生かして働き、持っていない時は何か一つ習得するようにしました。この種の仕事は彼らにとって、人々に接する機会を与えてくれるもの、また、福音を告げ知らせる手段だったのです。しかしこの新しい思いつきも、会が発展し、次第に聖職者としての決まった型の生活や隠修道会的生活を営むようになるにつれて消滅してしまいました。それ以来、会は司牧的な仕事（司祭職、説教、研究）や、社会福祉の仕事（病人の看護、貧しい人の世話、軽視されている社会層の向上）およびブラザーの兄弟による家事労働を主にしてきたのです。

27．最近では、全般的な修道生活の発展に参与し、他の修道会の試みにも影響されて、フランシスコの考えていたような労働の側面が再認識されています。兄弟たちの仕事や職業も多様化してきました。兄弟たちの大多数は、当然のことながら、司牧職や会の事業での奉仕活動、および修道院内の家事労働などに携わっていますが、最近では教会やフランシスコ会に属さない企業や施設で有給の仕事や職業に従事する兄弟がますます増えてきています。こういった傾向もまた、私たちの召命に適っているように思われます。なぜなら、それによって特別な形で社会に浸透し、社会の建設のために働くことができると同時に、額に汗して生活の糧を得ている勤労者たちに近づくことができるからです。これは未来に

通じる道であると同時に、私たちを会の本源に立ち返らせる道でもあります。

28. 従って、キリスト者としての、またフランシスカンとしての生活と両立するものであるならば、兄弟たちがどのような仕事や職業についてもよいと思います。会の事業で働いたり、教会関係の施設で奉仕したりすることは確かに必要ですが、一般の人々に交じって働くことは、兄弟である人々に近づく機会となるので、奉仕と証しの一つの形態としてとても重要です。

29. もちろんこうした社会参加にも、それなりの限界があります。たとえば人間としての限界です。なぜかという、仕事や金儲けの奴隷にならないように、また人間性を損なうような組織社会にあっても、人間としての自由を保っていくように気をつけなければならぬからです。もう一つは、私たちの生活様式の持つ限界です。私たちにとって絶対の優先権を持つもの、それは神を探し求めること（内的生活、一人になること、祈り）、兄弟的な生活、いつでも人の求めに応じる奉仕の態度、清貧、そして権力を持たないことです。私たちの本質的な使命とも言うべきこの種の生活を習慣的に妨げるような職業は決して引き受けてはなりません。

30. ですから、労働が被造世界の完成と人間の成熟、人類の運命への参与につながるということを認めつつ、立派に、誠実に働きながら、労働が意味を持つのは、世界を人間の生活の場とするために絶えず働いておられる父なる神（ヨハネ 5:17）とのかかわりにおいてであることを認識する必要があります。

現代世界における平和の使者として

31. フランシスコ会の本質的な使命、つまり、教会と社会の中で果たさなければならない天職とは、今まで述べてきた生活目標を具体的に実行することです。人間社会の中で信仰を体験的に生き抜くように努力し、すべての人を迎え入れることのできる愛と奉仕の共同体を作り、貧しい人々と希望を共にしながら清貧と勤労のうちに生きるならば、私たちは、聖霊の力で復活されたキリストの周囲に集められる新しい人間集団の草分けになることができますと思います。教会と人間社会の建設のために私たちにできること、それは、何よりもまず、生活によって証しすることなのです。

32. 神がイエス・キリストにおいて成し遂げられたこと、また今も私たちの中で、そして世の中で継続しておられることを告知させる御言葉が、私たちの使命と密接に結びついていることは言うまでもありません。このことは、フランシスコが福音書の使徒たちの派遣に関する個所から学び取ったもので、それを教会が確認したのです。私たちはみな、「自分が抱いている希望について説明する」だけの勇気を持っていなければなりません（1ペトロ3:15）。司祭となった兄弟たちは、その職務にふさわしい方法で御言葉を宣べ伝えますが、他の兄弟たちも、主イエスを言葉によって宣べ伝えなければなりません。

私たちは、戸惑っている信者たちや、信仰を探し求めている人々、また、さまざまな方法で生活共同体を築こうとしているキリスト者のグループに、特に注意を払う必要があります。

33. 都市のまっただ中に、種々さまざまな人が集まって各自の物資や仕事を分かち合うような兄弟的な共同体を私たちが築き上げようとするならば、必然的に政治的・社会的反響を呼び起こします。なぜならこういった共同体は、仕える者となるために権力を拒否し、貧しい人々と親しく接して、抑圧された人々の運命に共感できるような生活様式を選ぶものだからです。こうした意思表

示を何かの政治思想と混同しないように、また、社会の風潮に利用されないように注意し、真福八端の厳しい要求を徹底的に推し進めるように努力しなければなりません。そうするならば、私たちは、人間が自由で、兄弟として認められ、尊敬されるような共同体を生み出すことができるという可能性を示すことができるでしょう。人間の作る社会は、どんなに成功しても神の国とは違うので、この可能性は常に相対的なものではありません。

34. そこから出発し、また私たちの平和の人となる使命を常に自覚しているならば、現代の諸問題や社会的・政治的闘争に、本当の意味で参加することができるでしょう。それには、単なる感情的な熱意や早まった判断、無責任な発言を避けるため、事実即した客観的な状況判断のできる正確な情報が必要です。さらにまた、私たちが正義に生き、分かち合いの生活をしようと努力し、与えられた能力や才能に応じて、現代の貧しい人々や疎外されている人々の運命や仕事に参加するならば、その時こそ、抑圧された人々の叫びに加わって共に闘う権利と義務を受けるのです。しかし、それは愛から出た行動でなくてはなりません。どのような社会集団に属している人であろうとも、その人自身を愛するゆえの行動でなくてはならないのです。このようにして、平和の働き手である私たちは、人々の間に壁もなく、他者を支配する人もない神の国の到来を促進することができます。そこには、「もはや奴隷も自由な身分の者もなく、・・・ただ神の子だけがいる」(ガラテヤ 3:26-28)のです。

35. 教会での私たちの使命についても、社会での使命とある程度同じことが言えます。福音に従って、信仰、相互愛、清貧のうちに生き、権威を奉仕のために行使するならば、教会の中でも刺激剤となり、福音に反するものに異議を申し立てる役目を果たすことができます。しかし、これは容易いことではありません。なぜなら、悪や失敗の原因は常に私たちのうちにあるからです。口先だけの抗議で自己満足するのは、偽善にすぎません。

フランシスコ会の組織の意味

36．私たちの生き方というものをよく考えてみると、この会が一つまたはいくつかの、はっきり決まった任務を果たす目的で作られた組織ではないことがわかります。私たちは、教会の交わりの中で、フランシスコの精神に生きるすべての人と一致して、福音に適った生き方をしたいとひたすら願い、また、そのような生き方こそがキリスト者の姿を証しする助けとなることを確信している兄弟の共同体です。

37．組織として必要であり、また、私たちを「会」(小さき兄弟会)として成立させる基本となるもの、それは、私たち会員間の、また教会との深い兄弟的な交わりです。それは、私たちの証しを絶えず、ますます福音的なものにしてくれます。これこそは、地域レベル、管区レベル、会全体のレベルにおける私たちの兄弟共同体の権威の根本的な意味なのです。権威を委ねられている兄弟たちは、兄弟間の良い関係と一致を保証し、各自にキリスト者としての責任を自覚させると共に、彼らの福音的・フランシスカンの使命感を強め、彼らを孤立状態から連れ出して、より広い交わりに心を開かせる義務があります。これは特に総長の役目です。つまり、世界各地に住む兄弟たちの一致を、頻繁な意見交換や個人的接触によって保ち、教会当局に対しては会の代表者となることです。

38．以上の基本的な絆が保証されるならば　この面ではまだまだなすべきことがあるとしても　、これまで十分に生かされていない独立や自由を、各共同体、管区、その他の文化的・地域的グループに大幅に与えるべきでしょう。必要な規則の目的は、怠慢や無責任に陥らないように、責任分担を確立し、守ることです。多くの細かい規則よりも、兄弟間の、また兄弟たちと長上との間の対話と個人的接触の方が大切であることを肝に銘じましょう。

39. それぞれのグループ（地域共同体、管区、会）において、すべての兄弟が責任を持つことが大切です。多様性は良いことですが、そのために各グループが孤立することのないように注意し、責任者同士、また異なるグループの兄弟間の交わりと対話が行なわれるように配慮する必要があります。

40. 規則の作成に当たって、フランシスコ会は独自の道を歩み、混乱や分裂を避け、融通性や柔軟性を保ちます。そして、総集会の都度、規則の再検討と改正が行なわれるように図ります。

このようにするならば、私たちは聖フランシスコの言葉どおりに生きることができるでしょう。すなわち、今までほとんど何もしなかったことを自覚し、私たちに呼びかけられている福音的回心に向かっていつも新たに出発する心構えができていくようになるのです。

【*Acta Capituli Generalis Ordinarii Ordinis Fratrum Minorum*, Madrid 1973, Curia Generalis Ordinis, Roma 1973, pp.491-502】

反省のために

A

個人的な熟読と研究。
兄弟的な分かち合いの中で生まれた感想や興味。

B

質問

臨時総集会に向けて

「現代のフランシスコ会の使命」1 11

1 .

「小さき兄弟たちの会則と生活は、私たちの主イエス・キリストの聖福音を守り、従順のうちに、何も自分のものとせず、貞潔に生きることである。」(会則 1:1)

日常生活の中で真の信仰を再発見するためには、神の御顔を探し求める情熱とあらゆるものを徹底的に捨て去ることが必要です。

私たちの召命と使命を新たにするためには、具体的にどのような障害物を取り除くべきだと思いますか？また、個人として、共同体として、どのような手段(組織)を提案すべきだと思いますか？

2 .

「教会における私たちの役割は何ですか？現代社会における私たちの特別な使命とは何ですか？」(パウロ 6 世)

このような質問に対し、フランシスコと当時の兄弟共同体は、教会を当時の社会に近づけることによって、答えました。

教会と社会との間の対話を促進するためには、どのように教会と関わっていったらよいと思いますか？また、どうしたら、もっと人々の中に存在を示すことができますか？

「現代のフランシスコ会の使命」12 30

3 .

「母がその肉親の子を養い愛するとすれば、兄弟たちは、どれほど心をこめてその霊的兄弟を愛し、養わなければならないであろうか。」(会則 6:8)

恐れ、信仰の不足、個人主義は、しばしば手を携えてやってきます。私たちの進歩を妨げ、閉鎖的な壁や差別的な壁を築きながら…

より本物の観想的で宣教的な兄弟共同体を作るためには、どのように個人的なつながりを深めたらよいでしょうか？

4 .

「兄弟たちは、家、土地、その他いかなるものも、何一つとして自分のものにしてはならない…」(会則 6:1)「私はまた、自分の手で働きました。そして今も働くことを望みます。すべての兄弟もふさわしい仕事に従事するよう、切に望みます。働くことを知らない人は、それを学びなさい。しかし、これは働きの報酬を受ける欲望のためではなく、模範を示し、怠慢を避けるためです。」(遺言 20 21)

「会則」と「遺言」に書かれ、「会憲」(72 82 条)にも定められているこれらの事項を今日実践するにはどうすればよいでしょうか？

どのような節制と連帯の生活を、個人として、また共同体として、実践することができるのでしょうか？

「現代のフランシスコ会の使命」31 40

5 .

「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。この世で堪え忍ぶすべてのことにおいて、私たちの主イエス・キリストへの愛のために心身の平和を保つ人こそ、まことに平和を実現しています。」(訓戒の言葉 15)

自分自身および兄弟たちと和解して、この世と同じ傷を自分の身に受けながら、私たちは具体的にどのようにして、この世に平和をもたらすことができるでしょうか？また、そのために、どのような困難に出会うでしょうか？

6 .

「主からしつけられる時に堪え忍び、聖なる従順のうちに堅忍しなさい。主に約束したことを、寛大でゆるがめ決心をもって守りなさい。」(全兄弟会にあてた手紙 10)

私たちの召命と使命を見直す(retrain)ためには、どのような手段、どのような兄弟的・修道者的環境、どのような組織(個人として、対人関係において、また「住まい”habitat”」としての)をもっとも活用すべきだと思いますか？個人として、また共同体として福音の教えに従ってより早く成長するのを妨げるものは何だと思いますか？

「フランシスカンの生活の中心は、
イエス・キリストとの個人的出会い、
すなわち神への信仰体験です。」

臨時総集会に向けて
「現代のフランシスコ会の使命」

翻訳・発行：フランシスコ会日本管区

発行日：2005年4月3日

106-0032

東京都港区六本木 4-2-39

聖ヨゼフ修道院

03-3403-8088